

自分の国・憲法は自分で守ろう、軍事力ではなく憲法力と国民の団結力で。占領69年の2014年を主権回復へ始動の年に「平和的で責任ある政府が樹立されたとき、連合国の占領軍は、直ちに日本国から撤退しなければならない」ポツダム宣言

「沖縄平和の旅」～戦後は終わっていないことを心底知った～

—2013年12月16日から19日まで—

福井典子（東京・渋谷区選出元都議会議員）

沖縄の歴史と現状を余すことなく知った貴重な旅でした。なぜこの旅が実現したか。それは私たち渋谷革新懇話会が、2011年10月19日に開催した「オスプレイはいらない渋谷集会」に端を発します。伊波洋一さんをお呼びしての企画で、私たちはどうしても沖縄を訪ねなければという思いにかられたのです。早速、旅行社・ユーラシアツアーズにお願いして、旅の計画を立ててもらいました。しかし、いろいろの事情から今回ようやく実現したという次第です。ですから、参加者も東京、神奈川、埼玉、青森と多岐にわたり、その分、交流も深まったということにもなったわけでした。総勢50名の私たちは、12月16日の昼に成田から沖縄・那覇空港に降り立ちました。到着後、直ちに私たちの頭上で、耳をつんざくような「ゴォッ」という飛行機の爆音が響きました。この下に県民の暮らしがあることを先ず、鋭く突きつけられたのでした。

一日目は「米軍基地の実態にふれる一日」ということでした。まず高台に立って県民から撤去を求められている普天間基地を一望、オスプレイは現在24機ということでした。現地の平和委員会のみなさんが、貴重な資料をもとに終始熱心に説明して下さいました。

市民の日常生活がある頭上で、繰り返して行われる飛行機演習のすさまじい実態を目の当たりにして、私たちは胸のつぶれる思いでした。その後、専用車で嘉手納基地に向かい、ヘリが墜落した沖縄国際大学などを見て、その日は沖縄市内のホテルに一泊しました。

翌日は、宮森小学校のZ機墜落現場を訪問しました。説明して下さいた当時の教師、豊浜先生の一言一言は、胸に深くささり、みんな涙を流して聞き入りました。

1959年6月30日にアメリカ占領下の沖縄・石川市で発生したアメリカ空軍機の航空事故は死者17名、重軽症者210名、校舎や周囲の民家を焼き尽くすという大惨事となったのです。その痛恨の思いを胸に、先生は長年かかって証言集を編纂し、あの映画『ひまわり』を世に送り出したのです。今でも、基地周辺の小学校では飛行機が墜落したらどうするかという避難訓練をしているそうです。「沖縄ではそんな小学校があることを知ってください」と力をこめた先生の言葉がやきつきしました。

次いで名護市辺野古の海と闘争小屋を訪問。金網に括られたリボンや旗のはためくなかで、沖縄県民の切実な願いに思いをめぐらせ、改めて感慨にふけりました。

その足で稲嶺名護市長後援会の事務所も訪問、みんなの寄せ書きとカンパを手渡しました。

三日目は沖縄戦を迫体験する日程で、南部の地下洞窟のひとつ「轟濠」に全員で入りました。用意していった懐中電灯や軍手が役にたって、みんなで手をつないで気をつけながら、どうやら無事に体験することができました。沖縄戦が始まる前、各集落住民が避難壕として整備し、使用していたところです。真っ暗な壕の中で、まさに当事の県民の苦痛を味わいました。次いで県立平和資料館・平和の礎などを巡りました。刻銘碑にあったのは、2009年6月21日の時点で24万856人ということでした。

そして、ひめゆりの塔・資料館です。当時の生き残りの高齢女性が資料の説明に立っていて、互いに固い握手を交わしました。

夕暮れ近くなって、最後に2013年3月に開設されたばかりの*瀬長亀次郎さんの資料を集めている「不屈館」を訪ねました。次女のちひろさんの説明を聞いて、そのすばらしい生涯に改めて深い敬意を表しました。

四日目の最終日には、1945年、学童疎開で1476名もの犠牲者をだした対馬丸事件を顕彰する記念館で生存者の証言に接し、改めて深い悲しみを覚えました。

日程のなかでは、観光地もいくつか訪問、沖縄の歴史と美しい自然にふれることもできました。しかし、今回の旅は何といっても、沖縄を訪れることで「平和」への思いを深めるよい契機になり、同じ時代を生きる者としての責任をいっそう問われることになりました。沖縄を離れる直前も、その日から始まった県庁前の基地撤去を訴える集会に参加し、激励して帰途につきました。

帰ってからは、あらゆる集まりや会議でこの見てきた実態を語りました。

そして、あの昨年12月27日の辺野古基地移転を求める仲井真知事の裏切り、変節です。現地のみなさんのたたかいは、いかばかりかと思いました。私たちは今回の訪問を期に、米軍基地のない沖縄・日本の現実に向け、いっそう頑張っていく覚悟を固めました。

そして全国注視の選挙、名護市長選の火蓋が切っておとされ、1月19日、稲嶺さんは圧倒的勝利をおさめたのでした。いかなる策動にも屈しなかったこの勝利は私たちを励まして止みません。「私たちは決して負けません。何故なら勝つまでたたかいをやめないからです！」という現地のみなさんの叫びがいつも耳を離れません。「沖縄平和の旅」に参加した者として、今後も沖縄のたたかいにしっかりと呼応していきたいと思っているこの頃です。

（2014年2月12日記す）*元那覇市長、衆議院議員

